知的障害特別支援学校におけるエピソード記録による一人一人の対話性の探求（1）

―子どもの内面を推察するエピソード記録と事例検討会について―

小出　博史・岡澤　慎一・齋藤　大地

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要　第8号　別刷

2021年8月31日

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要　第8号　2021年8月31日

知的障害特別支援学校におけるエピソード記録による一人一人の対話性の探求（1）†

―子どもの内面を推察するエピソード記録と事例検討会について―

小出　博史*・岡澤　慎一**・齋藤　大地***
宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校*
宇都宮大学大学院教育学研究科**
宇都宮大学共同教育学部***

本稿では，知的障害特別支援学校における授業作りに関して，「対話性」という観点から検討を加えた。子どもが自らの思いや願いをもち，発信していくことが学びの前提にあることから，子どもの内面を推察するためにエピソード記録と事例検討会の在り方について検討した。エピソード記録では，当事者である子どもと教師の意識体験を含めて書くこと，そして事例検討会では子どもの内面を推察して付箋に書くことを通して，内面に迫ることにした。さらに，教師の同僚性を活かして，複数の視点から記録や検討を行った。互いの意見を尊重し合いながら，多様な意見の中で新たな気付きを得る，謙虚に学び合う教師集団の重要性を指摘した。

キーワード：対話性，エピソード記録，事例検討会，知的障害特別支援学校

Ⅰ　はじめに

宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校では，「対話性を重視した学びに基づく教育実践の創造」を研究テーマに掲げ，三年研究に取り組んでいる。複雑な状況の中で生きるために必要な力を「自ら考え，判断して行動を調整できる力」と捉え，一人一人が内面をより豊かにして学びに向かうために「対話」という考えに注目した。

「知的障害教育における対話的な学びとは何か？」を出発点として，対話について考え，本校における授業改善の視点として「対話性」を定義するに至った。本校では，対話性を「相互主体的に，自分の考えを表現したり他者の考えを受け止めたりする中で，新たな認識を柔軟につくり出す態度や性質」と定義した。対話の要素を踏まえつつも，対話そのものは難しいことが予想される児童生徒の実態を考慮し，対話を通じた学びにつながる在り方を模索した結果である。また，別の側面から捉えるならば，子ども主体の学びをどのように創造していくかという実践研究でもあった。

一年次の研究では，授業作りの成果が少しずつ挙がってきた一方で，子どもの内面の見取りと，日頃からの集団作りという二点については，今後の課題として残った。特に，内面の見取りの難しさについては，今後一人一人の学びを見つめて授業改善を図っていく上で，大きな課題になると捉えた。

知的障害のある子どもは，話の内容をうまく理解することができなかったり，必要な部分に注目することが難しかったり，見通しがもてずに不安定になってしまったりすることがある。さまざまな課題に直面する中で，いつも生き生きとした心の動きばかりではないことは想像される。一人一人の学びの

---

† Hiroshi KOIDE*, Shinichi OKAZAWA** and Daichi SAITOU***: Dialogicality of children with intellectual disability clarified by episodes of educational activities at special needs school (1) – Using episode recordings and case study meeting to infer the inside of children
Keywords: “Dialogicality, Episode recordings, Case study meeting, School for children with intellectual disabiliy”

* Special Needs Education School Attached to the Faculty of Education, Utsunomiya University
** Graduate school of Education, Utsunomiya University
*** Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University
（連絡先：okazawa@cc.utsunomiya-u.ac.jp）
（連絡先：daichis@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

過程には違いがあり，それに応じた内面の変化があり，多様な姿となって現われてくる。

対話性を重視した学びでは，子どもの内面（意欲，安心感）を大切にしている。子どもが学んでいるときの思いを見つめて子どもと一緒に学びを創っていくこと，他者との関わりの中で安心感や意欲を育んでいくことが必要だと考えたからである。

子どもの内面は，表情や仕草等といった一瞬一瞬の細かな変化に表れることから，客観的には把握しにくいものである。しかし，子どもの内面にしっかりと向き合い，子どもたちが何を感じ取り，何を思い，何をしたのかという，ふるまいや発言等といった客観的な事実と，教師による内面の推察を結びつけて豊かに捉えていくことは，子ども主体の学びを考える上では大切な観点となる。

そこで，客観的な事実と合わせて，子どもの内面を描いていくエピソード記録を基にして事例研究を行うことにした。エピソード記録と事例検討会を通して，教師は自己の実践に対する姿勢を振り返りながら，子ども主体の学びにつなげていく。客観性や再現性が明確とはいえないが，様々なやりとりを重ねていく過程を大切にし，子どもの事実から実践を構想していくという姿勢は，資質・能力の育成にアプローチしていく教師としての在るべき姿に一歩ずつ近づいていくともいえるだろう。複雑な文脈の中で学び続ける一人一人の子どもたちの姿について対話と省察を重ねることで，子どもたちが意欲的に学び合う姿につなげていきたい。

Ⅱ　目的

児童生徒一人一人の学びを見つめるための方法として，エピソード記録と事例検討会の在り方を検討し，実践を積み重ねることとした。

Ⅲ　方法

エピソード記録と事例検討会の実施方法について検討し，2020年6月～11月まで実践を行った。その後，教師21名を対象にアンケート調査を行い，エピソード記録と事例検討会の在り方について検討した。

Ⅳ　結果

1　エピソード記録の検討

子どもたちの実態の分析から目指したい姿を設定し，支援の方向性を考えた。授業場面や学校生活全般を通して教育実践を積み重ね，そのときに教師の心に強く残ったエピソードを記録した。その際，子どもの姿を多面的に把握するために，複数の教師で適宜記録した（図1）。

○月○日「休み時間にボール遊びをするＡくん」

いつものように着替えを終えると，トイレに入って安心する。時間があったので外遊びに出ると，少し先にあるボールを手に取る。周りに何もない壁の前に立つと，周囲の様子を視線でうかがう。両手で持ったボールを下から投げて，壁に当たったボールが跳ね返ってくるのを一人で楽しむ。
教師はその様子を，じっと見ている。Ａさんは，その視線に気付く。壁に当てたことが悪いと思っていたのか，「見つかってしまった」という表情を見せ笑う。教師はそれに対して何も言わず，Ａさんに対して「こっちでやろう」と誘ってみる。すると，ボールを持って対面し，何度かボールを投げ合うことを繰り返す。それを見ていた友達は，「（ボールを）かして」と言い，ボールをとると，Ａさんに優しく投げた。そのボールを受け取ると，持ったまま違う方向に走っていったが，穏やかな表情であった。

（※波線部は，内面を推察した部分）

図1　当事者の意識体験を含めて書いたエピソード

2　事例検討会の検討

子どもの学ぶ姿を丁寧に見取り，内面を推察しながら話し合い，今後の手立てについて考えていく。

参加者は，子どもの内面を推察することから始める。子どもの内面を表現するために，子どもの「つぶやき」を想像して付箋に書くという方法を用いた。付箋には，参加者一人一人の教育観，教職経験，実践的知識や理論的知識等の違いから，様々な「つぶやき」が表現される。

実践の当事者である教師は，エピソードを踏まえて，そのときの様子を振り返る。目指したい姿とエピソードから見える子どもの姿を重ね合わせ，今後の指導・支援に活かしていくための「問い」を立てる。

子どもの内面を踏まえて，指導・支援について具体的な検討を行う。教師の同僚性を生かした学び合いを通して，授業の善し悪しといった単純化した議論ではなく，子ども一人一人の学びを丁寧に，かつ謙虚に解釈して，次の実践に活かしていく（図2）。

図2　事例検討会における話し合いの様子

3　実践

エピソード記録を基にして取り組んだ事例検討会の様子を紹介する。

(1) 小学部３年生Ａさんの事例

Ａさんは，関わりの中で一生懸命に伝えようとするものの，不明瞭な発音であることから伝わらないことが多い児童である。そこで，伝わる喜びが得られるように環境を設定し，表出や関わりがさらに増えることを目指して実践に取り組んだ。

お店屋さんごっこをしているエピソードを踏まえて，小学部の教師7名でＡさんの内面を推察した。「いらっしゃいませ」，「おいしそうにできたよ」，「たくさん並べられたよ」，「僕がやっているから邪魔しないでね」等と，教師と楽しさを共有したい気持ち，満足した気持ち，友達に対する思い等，様々な思いをもって活動しているのではないかと推察した。Ａさんの内面を踏まえて，今後の手立てについて考えたことを，図3に示す。

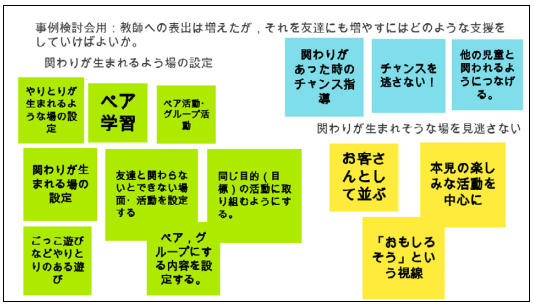

図３　Ａさんに関する事例検討会の様子

(2) 高等部２年生Ｂさんの事例

Ｂさんは，失敗することを嫌い，失敗をすると自分を責める言動が見られる生徒である。気持ちに波があり，人に対して攻撃的になることもある。そこで，友達と良好な関係を築き，落ち着いた気持ちで学校生活を送れることを目指して実践に取り組んだ。

高等部のPR動画を作成しているエピソードを踏まえて，高等部の教師7名でＢさんの内面を推察した。「動画撮影は得意分野だ」，「自分がリーダーとなって引っ張ろう」，「話し合いにはルールがあるって，先生が言っていたな」等といった様々な思いをもって活動しているのではないかと推察した。Ｂさんの内面と今後の手立てについて考えたことを，図4に示す。

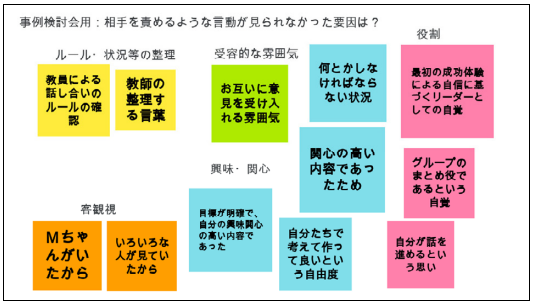

図４　Ｂさんに関する事例検討会の様子

4　取組に対する教師の評価

エピソード記録を開始してから半年経った段階で，教師21名に対して自由記述式のアンケートを行い，取組に関する評価を行った。アンケートの内容を抜粋したものを，表1に示す。

表１　教師への事後アンケート（N=21）

【問１ エピソード記録について】 子どもに対する見方について，新たに考えたことや感じたことはありますか？これまでの御自身の見方を踏まえて，お書きください。
〈内面の見取りについて〉 ・行動の前後の文脈や思いに注目して考えた。 ・「なぜ？」と考え直した。 ・「この子は今何を考えてこんなことをしているのだろう？」と常に考えた。 ・表情の変化やしぐさを見取った。 ・児童生徒のつぶやきを拾い，そのつぶやきを活かした。 〈日々の実践の積み重ねについて〉 ・直前の出来事だけでなく，日々の積み重ねを踏まえた見方を大切にした。 ・記録として残すことで，気付きがあった。 〈子どもに対する見方の変化〉 ・子どもの同じ行動を見ても，教師により解釈が大きく変わると改めて感じた。 ・今まで「自分の授業はどうか」と教師主体の見方で見ていたが，「子どもが楽しんでいるのか」，「主体的に取り組んでいるか」等，子どもの方に観点を置いて観察するようになった。 ・他の見方もあるのではないか…といった観点でも考えるようになった。
【問２ 事例検討会について】 事例検討会を通して，新たに考えたことや感じたことはありますか？これまでの御自身の見方を踏まえて，お書きください。
〈多面的な見方について〉 ・授業者の想像する内面に，様々な先生による考察を加えたことで，子ども像がより明確になった。そこから考えられる手立ても多様なものであった。 ・様々な見方や意見が共有できた。

・自分では気付かなかったことや，思い至らなかった考えに触れることができて，手立てを考える上で参考になった。
・「客観的な事実の記述」も，観察者によっては記述が変わる可能性があることを感じられるよう，一つの事実を目撃者全員が書くとよい。

〈内面の見取りについて〉

・内面を，子どもの立場に立って考える過程（子どもの言葉に置き換えて）は，とてもよかった。ハッとすることもあった。
・内面の変化は，すぐに表れないことが多い。
・内面の見取りは，生徒側と教師側のズレをどのように修正していくかが重要と考える。
・知的障害のある児童生徒にとって，深い学びができるのかどうかは，表面上の姿だけでは追い切れないところがある。児童生徒の特性から考えても，教師が内面を推察し，それを言語化したり，補足したりして学びを支援することがより深い学びにつながる気がした。
・児童生徒の活動の様子を見取る心構えや具体的な視点について，教師が意識し，経験を重ねることで見取りの技能を高めていくことが必要だと感じた。

〈事例検討会の在り方〉

・一連の流れの手順を踏むことによって，教師同士の共通理解は図りやすくなった。
・定期的な事例検討会は設ける必要があると思った。
・考察することが「当たり前」になるまで繰り返しやるのがよい。
・一人の子どもに対していろいろな意見が出たり，今後の手立てを考えたりする取組は，学びの多い研修となった。
・一人の生徒に限らず，気になる行動や最近ちょっと･･･と思ったときにできるとよい。
・事例検討会を行うとどうしても時間が長くなる。

エピソード記録と事例検討会という実践を通して，「子どもに対する見方」について教師一人一人が考えた。子どもの内面を見取るためには，「子どもの言葉に置き換えて考える」，「つぶやきを拾う」，「表情や仕草を見取る」，「行動の前後の文脈に注目する」，「なぜ？と考える」等が挙げられた。内面を見取ることの難しさを感じながらも，子どもの思いや考えを推察し続けることが大切であるという理解を共有することができた。

また，複数の教師で学び合う機会であったことから，一つの事実に対する解釈の違いが生まれ，それが様々な気づきにつながった。

Ⅴ　まとめと今後の課題

本研究では，児童生徒一人一人の学びを見つめるための方法として，エピソード記録と事例検討会の在り方を検討した。子どもの内面を見取ることの難しさに対して，当事者の意識体験を踏まえてエピソードを記録したり，子どもの「つぶやき」を想像して付箋に書くというかたちで事例検討会に取り組んだりすることができた。教師の同僚性を活かして実践を積み重ねていく中で，多様な思いや考えを推察できたこと，子どもの姿から次の手立てを考えていくことができたことは，成果として挙げられる。

実践を行った教師からは，改めて子どもの立場に立って考えることの大切さに言及した意見が多く見られた。特に，事例検討会に関しては，手順を明確にして，互いの意見を尊重し合う場を作ることができたことで，様々な意見を出し合うことができた。子ども一人一人の学びを丁寧に，かつ謙虚に解釈したことで，新たな気付きにもつなげることができた。

今後も，複数の教師で子どもの学びを見つめる機会を大切にしていきたい。継続して取り組めるような仕組み作りは課題となるが，子どもの学びを見つめ，謙虚に学び合う教師集団となれるように事例検討会等を重ねていきたい。

付記

本稿は，宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校において共同で取り組まれているものの一部を筆者らの責任の下に発表するものである。

文献

新井英靖他（2017）エピソードから読み解く特別支援教育の実践 子ども理解と授業づくりのエッセンス．福村出版.

鹿毛雅治（2019）授業という営み－子どもとともに「主体的に学ぶ場」を創る．教育出版.

鯨岡峻（2016）関係の中で人は生きる―「接面」の人間学に向けて―．ミネルヴァ書房.

岡澤慎一（2018）重度・重複障害児の事例研究との対話. 障がいの重い子どもの事例研究刊行会編，障がいの重い子どもと係わり合う教育 実践事例から読みとく特別支援教育Ⅰ．明石書店，450-455.

令和3年4月1日 受理

Dialogicality of children with intellectual disability clarified by episodes of educational activities at special needs school (1)
– Using episode recordings and case study meeting to infer the inside of children

Hiroshi KOIDE, Shinichi OKAZAWA and Daichi SAITOU